

裁判員制度プロモーションビデオに見られる 日本的表現の訳出に関する一考察

中 村 幸 子

はじめに

国民が刑事裁判に参加することによって裁判を身近で分かりやすいものとする目的で、平成21年に一般市民が参加して有罪無罪と、有罪の場合の量刑を判断する裁判員裁判がスタートした。導入に先立ち、最高裁判所はさまざまな広報用映画や動画を作成し、ホームページ上でも公開している¹⁾。その中に、広報ビデオ「評議」がある。これは、証人尋問や被告人質問の後に6名の裁判員が3名の職業裁判官とともに別室で自由に意見を述べ合う評議の様相をドラマ化したものであり、一般市民の裁判員たちが職業裁判官とどのように疑問点をぶつけ合い、意見を集約させていくのかのプロセスが描き出されている。「評議」の中には、裁判員たちが、被告人や証人が証言する場面を振り返るシーンがあり、そこには多くの英語に訳しにくい表現が含まれていることがわかった。もちろん評議自体は日本語のみで行われるものであり、仮に外国人が被告人や証人となる裁判であってもその評議は日本人裁判員によって日本語で行われる。しかし、もし当事者が外国人であったとすれば、この動画で扱われる検察官や裁判官の尋問部分はどれも外国語へ通訳されるわけであり、そうした日本語特有の表現を当該外国語へ通訳しなければならない状況も十分ありうる。そしてその通訳の正確性は被告人の防御権の観点からも担保される必要があるのである。

本稿では上記「評議」を題材にし、外国人事件の場合を想定して通訳上の問題が生じる可能性がある箇所を取り上げる。特に訳しにくい日本語表現（擬態語、古語・慣用表現、自動詞表現）の英

訳と BNC コーパスに代表される一般的な英語表現とを比較し問題点を論じていく。

1. コーパス言語学とは

コーパスとは、書きことばと話しことばを電子的に読める形で集めたもの、すなわちパソコンで読み取り可能なテキスト形式に保存された文書の総体であると定義づけることができる。しかしコーパス言語学の目的はコーパスそのものを研究することではなく、Leech (1992: 105) が強調するように、コーパス言語学とは「それ自体がひとつの研究領域なのではなく言語学的研究目的を遂行するための方法論的ツール」なのである。したがって、コーパスは研究のためのツールと捉えるべきである。本研究で採用する通訳・翻訳研究におけるコーパス言語学的アプローチとは、それ以外の方法では見つからないような語の隠れたパターンや傾向を発見し、それらを記述的通訳・翻訳研究に利用することを意味する。本稿では、必要に応じて、コンコーダンスソフトウェアやそれによって生成される KWIC コンコーダンス表示形式²⁾、語の出現頻度やその他の計量言語学の用語や技法を用いる。

1.1 翻訳研究とコーパス

現代の記述的翻訳研究において、コーパス言語学は一定の貢献を果たしている。一部には、Kenny (2001: 52) が述べるように、コーパス言語学の技法が、テキストの中に繰り返し出現するパターンや傾向を捉えたり、またはパターンから外れた用法の実例を示しつつその意味を議論できることが理由であろう。翻訳学の記述的研究に取り組む者にとっては、コーパスに現れるパターン

を自身の主張の証拠として利用しようとする一方で、翻訳学の研究者が、コーパスから翻訳規範を探ろうとすることもあるだろう。例えば、原文と翻訳文をコーパス化したもの³⁾を比較し翻訳文の特徴を分析する研究 (Baker 1999, 2004 など) や、ある特定の語の組合せが正しいのかどうかあるいは文脈上適切なのかどうかをコーパスツールを利用して調べるという方法 (Kenny 2001 など) は、コーパスを翻訳研究や通訳研究にも応用した研究例である。ただし、日本語から英語への翻訳物においてある語の組合せがコーパスに出現しなかったからといってその用法が正しくないことを意味するわけではない。そのような主張はそもそもコロケーションが自然生成される言語の帰納的観察の結果として表れる「慣習的な関係」(Firth 1957) であること自体に矛盾する。コロケーションは結局のところある語と語の組合せがその他の語との組合せよりも共起しやすい関係であることを意味する。しかし、語の組合せにはコロケーションの他によりゆるやかな連結関係であるレキシカル・コンビネーションがある。レキシカル・コンビネーションの場合は共起する語の自由度も高く、コロケーションのような慣習的かつ制約的な共起関係はない (詳細は Carter 1998 を参照のこと)。一例をあげれば、本稿で取り上げる「評議」に出現する「関係を続ける」の英訳 ‘continue relationship’ という表現の ‘continue’ と ‘relationship’ の組合せはコロケーションではなくレキシカル・コンビネーションである。コロケーションでは共起語の選択はほぼ決まってくるためより予測可能でありその意味では保守的な言語使用とみなすことができる。一方、レキシカル・コンビネーションは Sinclair (1991) が指摘するように、自由な共起関係を成し、コロケーションよりは創造的な語の組合せを可能にする。

本稿では、通訳者が日本語から英語に訳す際に行う語の選択に着目し、それらをコーパスの検索結果と比較した上で、通訳プロダクトにおける創造的な語の選択の可能性について論じる。

1.2 同義語の内の語彙選択

語の選択の問題は通訳が介在する裁判では非常

に重大な意味を持つ。通訳者が選択する語によっては全体の法的意味が変わってしまうことすらある。法律用語のみならず一般的な語でもニュアンスがすり替えられる可能性がある。例えば、英語の ‘beat’ ‘hit’ ‘strike’ は同義語のように聞こえるが、ニュアンスと法的意味は異なる。中村 (2010) では、これらの動詞の用例を Bank of English (いわゆる Cobuild コーパス) のうちの一般公開されているもので検索し、その使い分けを調べている。その結果、これらの語のコロケーションはそれぞれ異なるパターンがあり、これらの語が同義語といえども置き換え可能ではないことがわかっている。しかし法廷での実際の訳例を見てみるとこれらの語はいとも簡単に置き換えられてしまう。筆者らのチームが行った模擬法廷の通訳者は、『殴った』という語の訳語として ‘beat’ を使い、模擬裁判後のインタビューで「思いついた表現 ‘beat’ を用いたのであって特に意識して ‘hit’ と ‘beat’ を使い分けたのではない」(p. 167) と述べるなど訳語の選択に関してはあまり注意が払われていない様子がかがわれる。中村 (2010) では、‘hit’ と ‘beat’ のコロケーションの違いからそれぞれの語を使用して訳した場合に聞き手に異なる印象が生まれたことが論じられている。通訳者が訳出に迷う語や表現に出くわした時、仮に辞書を当たる時間はあったとしてもコロケーションまでみる余裕はない。そもそも辞書には詳しい用例や用法は載っていない。時間的制約もある中、通訳者はいわゆる同義語を使用した「次善の訳」を出すこともあろう。このような苦肉の策ともいえる方略は会議通訳ではむしろ推奨される (小松 2005) が、法廷通訳では危険な行為となりうる。通訳者が選んだ語彙によっては原発言のニュアンスが歪められ、思わぬ法的結果を生じさせてしまう可能性もあるからである。非常に微妙な語彙選択は、明らかな誤訳とは違い、しばしば誰も気がつかぬまま過ぎてしまうこともある。

1.3 訳しにくい日本語表現

本研究のために、上述の広報用映画「評議」より、英語に訳しにくい日本語表現を取り上げる。それらは、擬態語、感情表現、古語的慣用表現、

自動詞表現である。これらの日本語表現がふんだんに含まれたシナリオを4名のプロ通訳者に訳してもらって法廷実験を行った。次節で、訳語選択や訳出方略によって意味的等価性が担保されていない例を論じる。

日本語の典型的な特徴として、擬音語・擬態語表現の多用があげられる。それらは法律家の発話には少ないが一般市民である裁判員や被告人や被疑者の発話には頻繁に見られ（堀田2009）、擬音語は他言語にもみられるものの、擬態語は言語によってばらつきがあり、日本語は非常に多く見られるとのことである。水野（2010）は、「擬態語とは、「様子」や「心情」などを描写するレトリックである。つまり、音を立てない物事の様子を、音声的な印象に移し替えて抽象的に表現するものである（p. 170）」と説明している。本稿では、最初に、証人の証言中に出てきた「ずるずると」という擬態語について論じる。次に、古風で慣用的な表現といえる「情にほだされる」を取り上げる。この「情にほだされる」という表現は最近の若者にはあまり馴染みがない表現と思われるが広報映画「評議」では、検察官が使用している。最後に、自動詞用法の一例を取り上げたい。日本語では物事が起きた時あたかもそれが自動的に起きたかのような表現をすることが多い。Hinds（1986）はそのような自動詞的な表現は英語の受動態と似た効果を生じさせると論じている。本稿では、「ナイフが刺さった」という自動詞表現は単に受動態で表すことが可能なのかどうかを論じたい。

2. 法廷実験の方法

広報映画「評議」より、英語に訳しにくい表現をいくつか選択した。それらの表現を含むシナリオを作成し、4名のプロ通訳者に訳してもらった。彼らの通訳をICレコーダ（オリンパス Voice-Trek DS-750）で録音し、音声ファイル形式でパソコンに保存した。音声データより選択した語彙の通訳例のみ取り出し文字に転記した後、英語母語話者の一般的な言語使用例と比較した。本分析にはイギリス英語のコーパスである British

National Corpus (BNC) の話し言葉カテゴリーを使用した。BNCは、現代イギリス英語を代表する幅広いカテゴリーを網羅した話しことばと書きことば両方から成る約1億語の世界最大規模のコーパスである。

3. シナリオの概要

中原は婚約者の真由美と同居していたが、仕事が忙しいため真由美を一人きりにすることが多く、真由美はさびしい気持ちになった。そんな折、中原の友人であった朝倉が何かと真由美に優しく接し、真由美も朝倉に引かれていった。ある時真由美は朝倉と関係を持ってしまう。それ以来朝倉は真由美に結婚を迫るようになった。ある日朝倉が真由美と二人でアパートにいたところへ中原と鉢合わせとなった。中原が朝倉をなじると逆に朝倉は真由美と関係を持ったことを中原に告げ、中原をひどく罵った。真由美はいたたまれなくなってアパートを飛び出した。朝倉は真由美を追いかけ部屋を出る。中原も台所からナイフを持ち出し、朝倉を追いかける。二人は路上でもみ合いとなり朝倉から殴られなじられた中原は思わずナイフで朝倉を刺してしまう。

4. 考察

4.1 擬態語「ずるずると」

「ずるずると」は副詞的な用法として以下の意味合いを出すために用いられる。

①何かをゆっくりと地面・床に引きずる様

例) ロングドレスの裾を「ずるずると」引きずる

②物が斜面をゆっくりと滑り落ちる様

例) トランクが斜面を「ずるずると」滑り落ちる

③状況や出来事が必要以上に長く続く様

例) 関係が「ずるずると」続く

このように擬態語は目に見えない状況や状態、ことばを使って象徴的に表現するレトリック上の手法である。

広報映画「評議」では、「ずるずると」は、被告人中原の婚約者真由美が中原の友人であった朝

倉と関係を持ったことについて証言する場面で現れる。以下は証言の一部を抜粋したものである。

検察官：その後どうなりましたか。

証人： それから朝倉さんは「俺と結婚しよう」と何度も言うようになりました。でも私は、朝倉さんとずるずるとそうになってしまうのはいやでした。

この日本語証言を4名の通訳者は以下のように訳している。

通訳 A After that Mr. Asakura continued to ask me to marry him, but I, I didn't want to **keep this relationship** in this way.

通訳 B And Asakura started to say that he wants to marry me, but ... uh, several times, but I didn't like it that way.

通訳 C After that, Asakura-san asked me many times to get married to him. But I did not want to **continue the relationship** with him.

通訳 D Then, Asakura started telling me to marry me times, but I didn't want to **continue the relationship** with him.

3名は‘continue’と‘relationship’または‘keep’と‘relationship’を組合せた表現を用い、もう一人

は全く異なるという表現で訳している。BNCで‘continue relationship’と‘keep relationship’の出現回数と用法を調べてみた。BNCのKWIC画面を図1に表示する。

図1より‘continue’と‘relationship’が9語以内で共起する例は全部で53例出現していることがわかる。同様に、‘relationship’と‘continue’の出現回数を調べたところ、57回であった。以下それぞれの組合せを任意に5例ずつ抽出し1行目から10行目に転記した。波線は筆者によるものである。

continue + relationship

- 1 He had wanted to **continue** the **relationship** but the woman wouldn't let him.
- 2 September 30, but that both want to **continue** their business relationship into
- 3 with Japanese firms, but that it does want to **continue** its **relationship** with Ascii.
- 4 she and a male friend will be cautions of **continuing** a **relationship** that can be
- 5 tion of Asian girls **continue** to have strong and supportive **relationship** with parents

relationship + continue

- 6 you had a sexual relationship before, there is no reason not to **continue**, if the

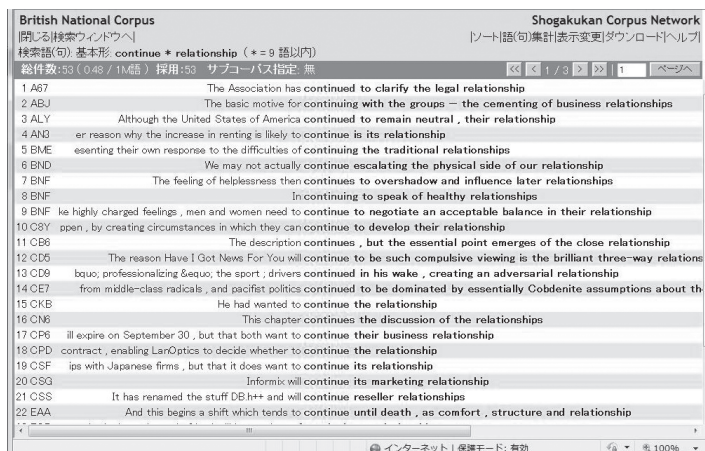


図1 ‘continue’と‘relationship’のKWIC コンコーダンス表示例⁴⁾

- 7 that a **relationship** that engenders such trust in infancy will **continue** to engender
- 8 The tendency is, then, for professional/client relationships to **continue** in the
- 9 It is important that a **relationship continues** to be built on love as the marriage
- 10 My friendly relationship with Shaheen **continued** until his death in 1984.

これらの例を注意深く観察すると、‘relationship’ と ‘continue’ の組合せは特に特定の共起関係にあるわけではなく、男女の関係のみならず「人間どうしの関係が続く」という意味合いであったり、人間以外の関係にも用いられていることがわかる。例えば1行目の例からは、‘he’ や ‘woman’ が使われていることから人間どうしの関係であることが示唆され6行目では、‘relationship’ は性的な関係を示唆する ‘sexual’ と共起している。しかし別の例では「ビジネス・取引」関係を示唆する ‘business’（2行目）や「会社」を意味する ‘firm’（3行目）のような語と共起している。そのほかの例でも ‘she’ や ‘male friend’ 「男友達」（4行目）と共起しているほか、‘girl’ 「女性」や ‘parents’ 「両親」などの人間との関係が続いていることを示す例が見つかっている。これらの例から ‘relationship’ と ‘continue’ の組合せが「男女間の恋愛関係が続く」という意味に限定して使用されないことがわかる。

次に、‘keep’ と ‘relationship’ の組合せの例を見てみる。‘keep + relationship’ の順番の用例は52例出現しており、‘relationship + keep’ の順番の組合せは26例見つかった。そのうちそれぞれ5例ずつ任意に取りだし、それを11行目から20行目に転記した。

keep + relationship

- 11 t myself be fooled, just in order to please him and **keep our relationship** going
- 12 of basic emotional energy which we need in order to **keep relationships** alive,
- 13 such as why you **keep** having the same kinds of

relationships with people

- 14 still **keeps** the wage-labour relationship and the work-role as determinative of
- 15 consultants are usually good at **keeping** these **relationships** and informing
- relationship + keep
- 16 ibe me with sex, so this aspect of our relationship was something he **kept** under
- 17 Human relationships cannot usually be **kept** within neat bounds by both partners,
- 18 your other **relationships** **keep** proving unsatisfactory, driving you back to him?
- 19 They are shown how the **relationship** can be **kept** in good order and repaired by
- 20 We have a good working **relationship**; let's just **keep** it at that, shall we?

‘keep + relationship’ と ‘relationship + keep’ の組合せはどちらの語順でも高い頻度で出現する。それぞれの共起語は、‘myself’ ‘him’（11行目）、‘you’ ‘people’（13行目）、‘consultants’（15行目）、‘him’ ‘me’ ‘our’ ‘he’（16行目）、‘human’ ‘partners’（17行目）、‘your’ ‘you’ ‘him’（18行目）のように人間であったり、‘working relationship’（20行目）のような人間以外との関係にも使用されていることがわかる。しかし ‘continue’ と ‘relationship’ の組合せが必ずしも男女間の関係が不適切なほど長引くという意味に使用されないのと同様に、‘keep’ と ‘relationship’ の組合せもまたそのような意味合いに限定されていないことがわかる。

そこで、「続く」という意味の別の表現である ‘drag on’ や ‘go on’ が「関係がずるずると状態が続く」という意味で使われるのかどうか同じコーパスでチェックした。しかし、1億語を収録するBNCからは ‘relationship’ と ‘drag on’ の組合せは一例も見つからなかった。ただ ‘relationship’ と ‘go on’ の組合せは4例のみ見つかっている。それらを21行目から24行目に転記した。

relationship + go on

- 21 The love-hate **relationship goes on**: you voted Margaret Thatcher both most
- 22 a vertical representation tells us nothing about the **relationships that go on**
- 23 It's the **relationship** between the client and the advertiser which **goes on** for
- 24 You can't have normal family **relationships** with this **going on**

しかしながら、これらの例はどれもある状況が長々と続いているという意味合いを表していない。そこで、‘drag on’や‘go on’が‘affair’と共起する例があるかどうかを調べてみた。しかしそのような例もやはり見つからなかった。このことが示唆するのは、‘relationship drags on’や‘relationship goes on’といった組合せは英語母語話者の一般的な用例ではないということである。そこで、再度‘drag on’という組合せが、ある状態が予想より長く続くという意味合いで用いられるかどうかを調べることにした。‘drag on’という表現は224例見つかっている。それらの例からは興味深い傾向が見られた。224例のうち80例(35.7%)で‘drag on’が「期間」を示す語と共起していることがわかったのである。そのうち8例を選び25行目から32行目に転記した。

drag + on

- 25 As the military mutiny **dragged on** for the sixth day, President Corazon Aquino
- 26 there is an increased tendency for disputes to drag on over weeks and months.
- 27 The conflict has already **dragged on** for five years; thousands have died.
- 28 Debate on Southcom's future, which has **dragged on** for years, was put on hold
- 29 The Somme **dragged on** through July, a futile and terrible battle of attrition
- 30 The war **dragged on** for decades.
- 31 for after an impressive opening, the eruption **dragged on** for a full three months

- 32 The fighting **dragged on** for another year, during which time the Nationalist armies

上記より、‘for the sixth day’(6日間)(25行目)、「over weeks and months」(何週間も何カ月も)(26行目)、「for five years」(5年間)(27行目)、「for years」(何年間も)(28行目)、「through July」(7月まで)(29行目)、「decades」(何十年も)(30行目)、「a full three months」(たっぷり3カ月)(31行目)、そして‘another year」(もう1年)(32行目)などがそうである。それに対して、‘drag’のもともとの意味である「何か重たいものや長いものをしばしば困難さを伴って地面に沿って引きずる」という意味に用いている例は16例(7.1%)しかなかった。つまり、‘drag on’を「ある状態が不必要なほど長い時間続く」という意味で用いる方が「モノを地面上に大変そうに引っ張って動かす」というもともとの意味よりもはるかに用例が多いのである。さらに興味深いことに、‘drag on’は否定的な意味を持つ語と共起する例が多いこともわかった。例えば、‘military mutiny」(軍の反乱)(25行目)、「disputes」(紛争)(26行目)、「conflict」(対立・紛争)(27行目)、「war」(戦争)(30行目)、「eruption」(噴火)(31行目)、「fighting」(戦闘)(32行目)などである。これらの例を日本語に訳した場合、例えば「紛争はもう5年も続き、数1,000人が亡くなっている。」(27行目)のような訳がぴったりする。他の例も同様である。これらのことから、‘drag on’という表現は「ズルズルと」の持つ意味合いに近いのではないかと思われる。そうであれば、「関係がズルズルと続く」という表現を英語に訳した場合、「a relationship drags on」という表現を用いれば、あまり好ましくない関係が必要以上に長引いて続いているという意味を出することができるのではないかと考える。とはいえ、日本語では「戦いがズルズルと続く」や「噴火がズルズルと続く」という表現は適切とは言えず、「戦いが長々と続く」という言い方をしたり、「噴火が延々と続く」と言ったりする。また会議も「ズルズル」とは続かず、「ドラドラと」や「延々と」続くというような言い方をする。したがって

「ズルズルと」は不倫関係のような男女間の不適切な関係が必要以上に長く続いているような状況で用いられる慣用的な表現と考えられる。英語では ‘a relationship drags on’ とか ‘an affair drags on’ のような表現は 1 億語のコーパスにも出現していないことから、このような組合せは一般的な用例ではないといえる。しかし、それでも日本語の原発言の意味合いに沿った英語表現を探すとすれば、 ‘love affair drags on’ や ‘sexual relationship drags on’ という表現は可能であり、むしろ、日本語の擬態表現を意識した創造的な語の組合せとみなすことができよう。

4.2 古語表現「情にほだされる」

この節では、「情にほだされる」という古めかしい表現を取り上げる。「情」とは、誰かに親切にされたことへの感謝の気持ちとある種の申し訳ないという気持ちがないまぜになった感情を指し、「恩義」のような意味である。「ほだされる」とはそのような恩義に報いなければならないという一種の義理に負けて必ずしも本心からとはいえない行動を取ることに近い。いわゆる「義理と人情」というウェットな日本の表現といえる。しばしばこの「義理と人情」は英語では ‘love and duty’ と訳されたりする。研究社新和英大辞典では「義理人情に厚い人」は ‘A person whose actions are strongly motivated by a sense of moral obligation and by humane feelings.’ のような表現が載っている。この広報映画「評議」では以下のような文脈で出てくる。

弁護人：被害者の情にほだされ、一度だけ関係を持ってしまったものの、それは恋愛感情ではなかったということですね。

この部分を 4 名の通訳者に訳してもらった結果をみていく。

A: Eh, you were **moved by the love** of this victim, but you didn’t have the feeling that, of, you didn’t think it was love, right?

B: Although you were **forced to have the**

relationship with the victim, but do you mean it was not from the love feeling?

C: Does that mean that you had an affair with the victim just once because **you could understand how he was feeling**, however, it was just once and no more.

D: **Feeling the victim’s, uh, sentiment to you**, you had an affair with the victim, but it wasn’t your true intention.

通訳者 A のみが「情にほだされる」の訳に ‘love’ を用い、 ‘moved by the love of this victim’ と訳している。他の 3 名は ‘love’ という語を使っていない。彼らは「情」が「愛」ではないことを知っているからこそ別の表現を使って何とか意味を出そうと腐心していると思われる。通訳者 B は「情」を恩義と義務感にとらわれた状態であることを、「関係を余儀なくされた」と義務感からであることを示す ‘forced to have the relationship with the victim’ という表現で訳し、その後「しかしそれは愛情からではなかったのですね。」という意味の訳を続けている。通訳者 C は「相手の気持ちを考えて」という意味の英語 ‘you could understand how he was feeling’ と訳している。D も ‘love’ という表現は使わず、「被害者の気持ちを感じて」という意味の ‘Feeling the victim’s, uh, sentiment to you’ という表現を使って訳している。

英語母語話者からは ‘touched by love’ や ‘moved by love’ のような表現に近いのではないかという意見が寄せられた。そこで、BNC で ‘touched by love’ と ‘moved by love’ を検索した。これらの表現はそれぞれ 33 例、39 例出現し、一般的な用法であることがわかる。しかしこれらの表現では日本語の「情」を表しているとは言い難い。以下、任意に抽出した例をそれぞれ 3 例と 4 例あげる。

touched + love

33 They were **touched by love!**

34 had never been **touched** before, was filled completely with his **love** for her.

35 But he was **touched** by the **love** people showed

him.

moved + love

- 36 Just as he **moved** with grace, strength and **love** among men and women, so the Christian
- 37 Captivated by Christ and his **love** she was greatly **moved** with **love** for my fellow
- 38 **Moved** by **love**, Nicandra tried.
- 39 the pulse that beat so rapidly there, and she felt so **moved**, so deeply in **love**,

上記の例をみてもいずれも日本語の「情にほだされる」という意味合いは出ていない。「情」を‘love’と訳すのでは到底不十分なのである。しかし、BNCのような英語母語話者の一般的な用例を集めたコーパスでこのような日本人独特の心的感覚を表す表現の等価物を探すことは難しい。

4.3 自動詞的用法

次に、日本語の自動詞的用法の英訳について検討してみたい。これらを文字通り訳した場合に英語母語話者にはどのように聞こえるのだろうか。ここでは「ナイフがたまたま刺さった」という表現を取り上げる。この表現は以下の場面で出てくる。

検察官：それで、カッとなって、朝倉さんを刺したのですか。

被告人：いいえ、持っていたナイフがたまたま刺さってしまったんです。

4名の通訳例は以下のとおりである。

- A: No, the knife, I, **knife happened to stab him**.
- B: No, that's not right. **The knife stuck him by accident**. It was just by accident.
- C: No, the **knife that I had in my hand accidentally stabbed him**.
- D: No. It happened to be that **the knife I was holding stabbed him**.

Bを除いて、3名とも‘the knife stabbed him’と

いう表現を使っている。これでは、どこから突然ナイフが飛んできて刺したことになってしまう。「ナイフなどの刃物で刺す」という表現は確かに‘stab’であるわけだが、‘stab’は他動詞の「刺す」であり、「自動的に刺さる」という意味はない。したがって、‘the knife stabbed someone by accident’という表現はナイフが偶然にもどこから飛んできて被害者を刺したという意味になり極めて不自然といえる。日英翻訳ではこの自動詞と他動詞の区別がしばしば問題となる。日本語では、ある種の出来事がまるで自動的に起きたように表現することがよくある。例えば、Hinds (1986) は、喫茶店などでウエイトレスが紅茶入りのポットとティカップを運んで来て客の前でポットからカップに注ぐ際にこぼしてしまった状況を「あ、こぼれちゃった」と言った、という例をあげている。Hinds 自身の英文での表現をそのまま引用すると、‘Oh, [it] spilled’ instead of ‘Oh, I spilled it’ (p. 53) となる。「自分がこぼしちゃった」のではなく「それがこぼれた」と表現されしかも主語の [it] すら略されている、という例である。このような言い方は日本語では頻繁に耳にする。しかしそれをそのまま英訳すると英語母語話者には非常に不自然あるいは無責任に聞こえる。日本語は、Hinds (1986) がいうように、状況に注目した表現をする言語であり、行為の主体をはっきりとはさせない言語だ (p. 52) という面がある。そこで、「ナイフがたまたま刺さった」という状況に着目した表現を英語に訳すために受動態を用いて ‘the knife was stabbed by accident’ とか ‘the knife was stuck by accident’ と訳せば明らかに不自然な英語となる。その一方で、‘I stabbed Asakura with a knife in my hand but it was not my intention.’ のように主語を明示して訳すとすればそれも大問題となる。なぜならこのプロモーションビデオの証言のポイントは被告人が故意に被害者を刺したのか、あるいはナイフが誤って刺さってしまったのが争点となっており、どう訳すかが非常に重要な場面だからである。BNCでは、‘stab + knife’ という組合せは30回、‘knife + stab’ の組合せは26回出現する。そのうちそれぞれ5例を40行目

から49行目にあげた。

stab + knife

- 40 Doncaster after being **stabbed** through the heart with a carving **knife** by Carol
- 41 on another and then springs on him **stabbing** him in the back with his **knife**.
- 42 that they had heard Slatter encourage James to **stab** PC Hewett with a sheath **knife**.
- 43 A BABY was **stabbed** twice in the back with a carving **knife** as he slept yesterday.
- 44 her as surely as if I had **stabbed** her with a **knife**, shot her with a gun, squeezed

knife + stab

- 45 en a youth, who had been wandering aimlessly, pulled a **knife** and **stabbed** Jonathan.
- 46 Suddenly the guy pulled a **knife** on the bouncer and **stabbed** him to death-right
- 47 One evening, after threatening her with a **knife**, he raped and then **stabbed** her.
- 48 bed beside Doreen's slim form only served to twist the **knife** that had **stabbed**
- 49 Mr Hughes said Sweeney picked up a **knife** from a table and **stabbed** the

‘stab + knife’ という組合せは比較的多く出現している一方、‘knife + stab’の方は、‘pulled/picked up a knife and stabbed someone’（ナイフを取り出し・取り上げ、人を刺す）（46行目）という表現で出てくることが多いことがわかった。やはり、‘the knife stabbed someone’（ナイフが誰かを刺した）という表現は全く出現していない。続いて、‘stick + knife’と‘knife + stick’の組合せも調べた。それぞれ24回と16回の出現回数であった。それぞれ5例ずつ50行目から59行目に転記する。

knife + stick

- 50 e and deftly drew out the clerk's **knife** which he **stuck** into his own sturdy
- 51 Tepilit runs up to the lion, draws his long **knife**

from its sheath and **sticks**

- 52 Well with a **knife** sort of **stuck** under your chin.
- 53 twigs, and Allen shredded a tinder-old branch with his **knife** and **stuck** it upright
- 54 top, yeah the easiest thing to do is just get a **knife**, **stick** it in and slit it

stick + knife

- 55 ce Of Fame: I give em everything and they **stick** a **knife** in my back.
- 56 that you desire then **sticking** in your **knife** into the thickest point of the meat.
- 57 This bastard **stuck** a **knife** into me.
- 58 it, there was one of those wooden blocks with about six **knives** **sticking** out of
- 59 her from that, although she felt as though he'd **stuck** a **knife** in her heart and

BNCで‘knife stuck someone’という表現を調べたが一件もヒットしなかった。‘stick’を自動詞として使用する用法は一般的ではないということになる。もちろん‘something is sticking out’（何かが突き出ている）（58行目）という意味での‘stick’の自動詞用法は成り立つ。しかし本研究で検討している意味とは大きく異なるため分析からは除外している。

‘knife’を動詞として用いる方法についてもコーパスで調べてみた。そのような用例は56例ヒットした。60行目から65行目に例文をあげる。

knife

- 60 I was slightly worried, I must admit, that he would **knife** me.
- 61 settlements in the event of death ‘why do you not just **knife** your wife
- 62 She would **knife** him if she had too, and then of course she'd end up in Bro
- 63 By seeming to agree, Mr Lawson **knifed** his one-time Treasury assistant in the
- 64 He was **knifed** in a cab, on the thirteenth of last month.

65 She had been **knifed** to death.

日本人通訳者にとって、‘knife’は名詞として使用することが多く、動詞として用いることはあまり一般的ではない。さらにこの動詞もやはり他動詞として用いられる用例が多い。しかし、もしこれを受動態として使用すれば、‘he was knifed’（彼はナイフで刺された）（64行目）、‘she had been knifed’（彼女はナイフで刺された）（65行目）となり、日本語での「ナイフが刺さった」という自動詞的用法で表される意味に近くなると思われる。

5. おわりに

本稿では最高裁が作成した裁判員制度プロモーションビデオに含まれる英語に訳しにくい日本語特有の表現から、擬態語表現、古語的慣用表現、自動詞的用法を取り上げ、それらを含むシナリオをプロ通訳者に訳してもらい、当該表現の通訳例を英語母語話者の一般的言語使用を収録したコーパスの用例と比較した。コーパスの用例と日本人通訳者の訳出例の間には微妙な違いがあり、この表現はこのように訳す、というようなパターンは見つからず、「翻訳規範」のような共通の傾向を引き出すことはできなかった。英語母語話者の一般的言語使用の実例を集めたコーパスでは、日本人のメンタリティや文化を反映した日本の表現に相当する等価物を検索することは難しいと言える。ただし、上述したようにコーパスに表れないからといってその表現が間違っているということではない。願わくは、両方の言語とその背後の文化を理解する通訳者によって日本語表現を忠実に英語に移し替えるための創造的な語彙選択による訳出がなされる可能性に期待したい。そのためには両言語のみならず背後の文化にも精通した有能な通訳者が法廷に配置されることが望まれる。実務家である通訳者がコーパスなどの研究者向けリソースやツールに容易にアクセスするのは難しい面がある。日本語の証言コーパスとその通訳コーパスといったパラレルコーパスが編纂され、実務家が訳例の検討を行えるような環境が実現するこ

とが望まれる。

注

- 1) 「評議」は <http://www.saibanin.courts.go.jp/news/video2.html> で公開されている。
- 2) KWIC 表示形式とは、検索した語または表現（ノード）を中心としてその前後に文章または文章の一部を表示する形式。KWIC とは Key Word in Context の頭文字を取ったものである。このような表示形式はコンコーダンス・ライン³⁾とも呼ばれる。
- 3) このようなコーパスはパラレルコーパスと呼ばれる。
- 4) このコンコーダンス表示画面は小学館コーパス・ネットワークより有料でアクセス可能である。

参考文献

- 小松達也 (2005) 『通訳の技術』研究社。
- 堀田秀吾 (2009) 『裁判とことばのチカラ』ひつじ書房。
- 中村幸子 (2010) ‘A Study of Lexicalisation and Re-lexicalisation in an Interpreter-mediated Courtroom Discourse: Corpus-based Approach’, 『人間文化』第25号 愛知学院大学人間文化研究所, pp. 163-179.
- 水野真木子 (2010) 「法廷証言における日本語独特の表現とその英訳の等価性の問題——人參通訳者の訳出表現と英語ネイティブ・スピーカーの表現の比較を中心に」『通訳翻訳研究』第10号. 日本通訳翻訳学会, pp. 177-192.
- Baker, Mona. (1999). ‘The Role of Corpora in Investigating the Linguistic Behaviour of Professional Translators’, *International Journal of Corpus Linguistics* 4(2): pp. 281-298.
- (2004). ‘A Corpus-based View of Similarity and Difference in Translation’, *International Journal of Corpus Linguistics* 9(2): pp. 167-193.
- Carter, Ronald. (1998). ‘*Vocabulary: Applied Linguistic Perspective Second Edition*’, London: Routledge.
- Firth, John Rubert. (1957). ‘A synopsis of linguistic theory, 1930-1955’, *Studies in Linguistic Analysis*, Special Volume, Philological Society, pp. 1-32.
- Hinds, John. (1986). ‘*Situation vs. Person Focus*’, くらしお出版。
- Kenny, Dorothy. (2001). *Lexis and Creativity in Translation: A Corpus-based Study*, Manchester: St. Jerome Publishing.
- Leech, Geoffrey. (1992). ‘Corpora and theories of linguistic performance’, in Jan Svartvik (ed), *Directions in corpus*

裁判員制度プロモーションビデオに見られる日本的表現の訳出に関する一考察（中村）

linguistics: proceedings of Nobel Symposium, 82. 1992, pp. 105-122.

Sinclair, John. (1991). '*Corpus Concordance and Collocation*', Oxford: Oxford University Press.

その他の引用

研究社新和英大辞典第5版

最高裁判所広報ビデオ『評議』[online] <http://www.saibanin.courts.go.jp/news/video2.html>

本研究の一部は、「裁判員裁判における言語使用と判断への影響の学融的研究」（科学研究費新学術領域研究21200046）の助成による。